

# 「ぼち」とその周辺語

——〈心付け・祝儀〉を示すことば——

橋 本 行 洋

## 1. はじめに

お年玉や心付けを入れる袋のことを、「ぼち袋」と呼ぶことが広く行われている。この「ぼち」は、

○正月のお年玉を入れるのに活躍したのがポチ袋。ポチ袋は関西方言で、一般的には祝儀袋と言われる。ポチ袋のポチは、昔の茶屋遊びなどでちょっと渡す心づけ、すなわちチップのことである。（佐竹秀雄「[もの知り百科] ことばのこぼこ ポチ袋」『読売新聞』2001年1月15日大阪夕刊2面）

のように、関西方言で「心付け」「チップ」に相当する語であるとされるが、その来歴については未だ明確でないところがある。

本稿は、この「ぼち」を中心に、その周辺語彙との関わりについての語史研究を行うものである。

## 2. 上方語「ぼち」

上記記事にもある通り、「ぼち」は上方由来のことばであったと考えられるが、たとえば平凡社の『大辞典』（1936年）に、

○宿屋・料理屋などの雇人、芸者・茶屋女などに与ふる祝儀。<sup>かみがた</sup>上方語。  
はな。チップ。<sup>てんたう</sup>纏頭。『ポチをやる』『ぼち袋』

とあり、牧村史陽編『大阪方言辞典』（1955年）には、

○ポチ（名）……祝儀。心づけ。はな。最近、チップといふ人が多くなったが、このチップの味がポチである。ポッチリすなはちほんの少しの意か（お粗末などと同じ）。ポチは金に限るが、オタメ、オアイソは、金にも品物にもいふ。

ポチだけで飲めると誘ふ法善寺 一絃（大正九 1920 年）

『全国方言辞典』ポチの項に「愛知県知多郡・和歌山・京都・香川・愛媛県松山・兵庫・中国」

という記載がある。なお尚学図書編『日本方言大辞典』（1989年）に拠っても、〈心付け・祝儀〉の意の「ぼち」を収録する方言辞書は、上に引用された東条操編『分類方言辞典』（1951年）と同様、愛知県以下滋賀県から愛媛県に及ぶ近畿・中国・四国のものに限られている。また、前田勇『上方語源辞典』（1965年）には、

○ぼち 心づけ。祝儀。チップ。（明治十九年・東京京阪言語違）〔語源〕初め花街語であったようである。ほんのぼっちり（少額）の意という。

とあって、もと遊里などにおける「花街語」であったと見られることが記されている。上掲例中に言及される前田喜兵衛『東京京阪言語違』（1886年）については、原本未見であるが、井之口有一・堀井令以知編『分類京都語辞典』（1979年）に、

○ポチ《名》祝儀。「お年玉を、どのポチ袋に入れてヤロカナ。」（言語違）に、ポチ（京阪）、御祝儀（東京）と。

という引用があって、「御祝儀」-「ぼち」という東西対立の示されていたことがうかがわれる。

### 3. 「ぼち」の初出とその語性

落語『蜘蛛駕籠（雀駕籠）』の上方版『住吉駕籠』には、酔客が「勘定

がポチも入れて二分一朱や。安いなあ」と言う場面があるが、この台詞がいつ頃から行われたものか、定かではない。

『日本国語大辞典』第2版には、次の例が古いものとして掲げられている。

○景伯 シテ、源五郎は得心せうかな。

平平 そりや得心する様に、最前ぼちが切れてあるぢやて

景伯 何から何まで抜け目のない旦那ぢやなア。(歌舞伎『傾城浜真砂』

1839年三幕<sup>(1)</sup>)

『傾城浜真砂』は上方歌舞伎(天保十年正月、大阪角座の初演<sup>(2)</sup>)であり、「ぢや」という文末表現から見ても、「ぼち」は上方語表現の中で使用されていることが知られる。

さらにこれより溯る可能性のあるものとして、宝暦年間成立とみられる艶道の秘事伝書『おさめかまいじよう』に、「ポチはずめばつけ部屋めくばりに応えて」「ポチ出して」という表現の存することがあげられる。同書は、宝暦九(1759)年の成立後二度の転写を経た、文化十(1813)年の写本が存するとされる。ただし本稿の筆者が披見し得たのは、その文化十年写本にもとづく和文タイプ印刷本を再翻刻した、斎藤夜居(1983)および花咲一男増訂(1992)による活字翻刻である。原本を披見し得ないことから確例とは断定できないものの、花咲氏の注に「ポチ袋については、この本あたりが資料としての上限か」(52頁)とあるごとく、現状ではもともと古い「ポチ」の用例と考えられる。同文献は、その序によれば京都の湯屋を祖とする道後の湯屋の楼主によるものと考えられる。岡野久胤『伊予松山方言集』(1938年)に、

○ポチ [ココロヅケ、シューギ、] 祝儀、心付け、チップ。

ポチをやらう。(祝儀をやらう)

ポチブクロ 祝儀袋。

とあるが、これより遙かに溯る近世中期に、既に同地方で「ぼち」の用いられていたことがうかがわれる。

一方、これに先行する上方の色道書『心友記』（1643年）、『たきつけ草・もえくゐ・けしすみ』（1677年）、『難波鉦』（1680年）そして『色道大鏡』（1680年以降）にも、管見の限りでは「ぼち（ポチ）」の語を確認することはできなかった。たとえば、藤本箕山『色道大鏡』に用いられている〈心付け・祝儀〉の隠語は、次に示すごとく「はな（花）」である。

○先<sup>まづあげ</sup>拳<sup>や</sup>屋<sup>ねんちう</sup>に<sup>か</sup>花<sup>ど</sup>を出す事、年<sup>しう</sup>中<sup>ぎ</sup>五<sup>たうにち</sup>ヶ<sup>ごにち</sup>度<sup>これ</sup>の祝儀の嘗<sup>しよしん</sup>日<sup>きやく</sup>・後<sup>けいせい</sup>日<sup>もくぜん</sup>によらず、出<sup>もちろん</sup>事<sup>しよしん</sup>勿<sup>きやく</sup>論<sup>けいせい</sup>也<sup>もくぜん</sup>。（巻第二・寛文格）

○初<sup>しよしん</sup>心<sup>きやく</sup>の客<sup>けいせい</sup>は、傾<sup>もくぜん</sup>城<sup>しよしん</sup>の目<sup>きやく</sup>前<sup>けいせい</sup>にて<sup>もくぜん</sup>花<sup>しよしん</sup>を出<sup>きやく</sup>す事<sup>けいせい</sup>を好<sup>もくぜん</sup>む、是<sup>しよしん</sup>い<sup>きやく</sup>かな<sup>けいせい</sup>る事<sup>もくぜん</sup>ぞや<sup>しよしん</sup>。

（同上）

○い<sup>こ</sup>で<sup>きんちやく</sup>其<sup>とりいで</sup>方<sup>ほう</sup>に<sup>きん</sup>花<sup>しん</sup>を<sup>や</sup>まい<sup>ら</sup>せんと、小<sup>こ</sup>巾<sup>きん</sup>着<sup>ちやく</sup>より取<sup>と</sup>り出<sup>で</sup>たる方<sup>ほう</sup>金<sup>きん</sup>十<sup>じゆ</sup>ばかりあ<sup>り</sup>りしと覚<sup>さ</sup>えし、（巻第十五・雑談部）

この「花」は『日本国語大辞典』第2版に、『寝物語』（1656年）、『京童』（1658年）、『世間胸算用』（1692年）等の例が掲げられており、近世前期から上方で（後には江戸でも）広く用いられた語であったことがわかる<sup>(3)</sup>。また、

○某<sup>ゆ</sup>も世<sup>さん</sup>間<sup>ゆう</sup>にては、遊<sup>きやう</sup>山<sup>やう</sup>遊<sup>きやう</sup>興<sup>きやう</sup>には花<sup>はな</sup>の露<sup>つゆ</sup>のといふて、前<sup>まへ</sup>巾<sup>きん</sup>着<sup>ちやく</sup>紫<sup>むらさき</sup>ふく<sup>さ</sup>きより出<sup>で</sup>て、か<sup>か</sup>ど<sup>ど</sup>や<sup>や</sup>―といふて重<sup>ちやう</sup>宝<sup>ほう</sup>はせらるれ共<sup>ども</sup>、（『宇喜蔵主古今  
嘶揃』一・二「元三に金銀え方参りの事」）

のような「つゆ（露）」も「はな」とともに用いられた語であったことがわかるが、同時期における「ぼち」の例は見いだしがたい。したがって、「ぼち」はこれらより後の語と見ることもできようが、出現する文献が艶道の秘伝書であったり、また前掲『傾城浜真砂』の例がくだけた会話文での使用例であることを考慮すれば、「はな」や「つゆ」より隠語性の強い、一層俗な表現の語であったと考えることもできるだろう。これに関しては、近現代の状況に関するものであるが、次の指摘が参照される。

○オヒネリ【名】心付け。祝儀。紙を捻って金を包んで渡したからオヒネリと言う。「よう世話してくれたしオヒネリあげとこ」。ポチは俗っぽい語であるが、オヒネリは上品な家庭の語。今ではあまり使用しな

い。(堀井令以知編『大阪ことば辞典』1995年)

#### 4. 近代文献に見られる「ぼち」とその関連語

明治期に入ると、「ぼち」は先に言及した『東京京阪言語違』(1886年)に京阪語という記載があって、「祝儀」と「ぼち」の東西対立が示されているが、やはり文学作品などには現れにくい語のようである<sup>(4)</sup>。

管見では、明治後期の『滑稽新聞』に次の例が見られる。

○<sup>こんなんひと</sup> 慥<sup>すく</sup>人<sup>は</sup>は<sup>せん</sup> 少<sup>おほ</sup>な<sup>せんぐらゐ</sup>う<sup>く</sup>ても<sup>は</sup> 二十<sup>はち</sup>銭<sup>へ</sup>, <sup>はち</sup>多<sup>はち</sup>いと<sup>はち</sup> 五十<sup>はち</sup>銭<sup>へ</sup> <sup>はち</sup>位<sup>へ</sup>の<sup>はち</sup> ポチは<sup>はち</sup> 呉<sup>はち</sup>れます<sup>はち</sup>(<sup>はち</sup>5),

(「若夫婦の喜劇」第56号, 1903年9月)

また同誌に連載された辞書体裁の連載「日本滑稽大辞林」には,

○はな <sup>しうぎ</sup> ぼち, <sup>はちへ</sup> 祝儀, <sup>はちへ</sup> 八<sup>はちへ</sup>々<sup>へ</sup>(<sup>はちへ</sup>「はの部(上)」第42号, 1903年1月)

○ぼち <sup>しうぎ</sup> 祝儀, <sup>しやぎ</sup> 謝儀(<sup>しやぎ</sup>「はの部」第47号, 1903年4月)

という項目がある。『滑稽新聞』は、「贅六文学」と称して主宰者宮武外骨の大阪滞在時に同地で刊行されたものであり、第1例は「少なうても」という関西方言とともに用いられている。また『日本滑稽大辞林』には、「～さかい」「ぼんち」等の関西方言も立項されていることから、これらの「ぼち」も関西方言が(あるいは意識されずに)用いられた例と考えるべきであろう。なお、外骨の出身は現在の香川県(旧讃岐国阿野郡)で、同地は「ぼち」の使用地域である<sup>(7)</sup>ことも、上掲例と関わりがあるものと思われる。

鈴木勝忠『続雑俳語辞典』(1982年)には,

○ぼち 遊里での祝儀。花。上 明治26錦の囊「相談して・ポチを仲居の立た間に」上 同36花くらべ「太多福めが・てらす仲居にポチ遣らぬ」

○ぼちぶくろ 袋 祝儀袋。江 明治31文芸倶楽部13「締てから・中のあらわるポチ袋」

前掲『大阪方言辞典』にも大正期の例が示されていたが、雑俳という俗文

芸に現れるところに「ぼち」の俗語性がうかがわれる。引例中の上・江はそれぞれ京阪（上方）・江戸を指すが、「ぼちぶくろ」の用例に示された江は、『文芸倶楽部』の出版元博文館が東京に存在したというだけの意味であろう。

下って、毎日新聞記者村島婦之による神戸新開地の見聞録<sup>(8)</sup>『わが新開地』（1922年）に、

○それも「御案内イ」の声に送られて、階段をトン—と上れば、二三円のお払ひと、少くも五十銭のポチが必要となるので、飽まで「新開地式」の鉄則を厳守する料理店主は、夫れすら遠慮して、階下の広間を或は椅子席とし、或ひは框式<sup>かまちしき</sup>として、土足の儘腰をかけ乍ら、手輕に食事を取る事が出来る上に、ポチなどの冗費<sup>ぜうひ</sup>を省かせるやうな仕組にしてゐるのです。（「三、大百貨店『新開地』◇ブルジョアジー入るべからず」）

をはじめとして、しばしば「ぼち」の例が認められる。その中には、

○彼女達（＝料理屋の仲居筆者注）は芸妓や雇仲居のやうに一時間何本何銭といふ花代がきまつてゐる訳でもなし、親方から十分のお給金を貰ふといふ訳でもなく、全くお客さんが心まかせてくれる纏頭<sup>ぼち</sup>をあてにしてゐるのだから、此奴<sup>こいつ</sup>いやなお客と思つても色に出さず、只だ一厘でもポチの多からん事を望むのあまり、可笑しくなくても笑って見せ、厭と思つても思はせ振り位はして見せねばならない。（「一、水商売の女軍二千◇売る可からざるものを売る」）

のごとく「纏頭」に「ぼち」の振り仮名を付した例も見られる。「纏頭」は前掲『大辞典』にも「ぼち」の語釈中に用いられていたが、本来中国語を出自とする漢語であった。たとえば『漢語大詞典』には、「1. 古代歌舞藝人表宴完畢，客以錦為贈，稱“纏頭”。」として唐代の杜詩などの例をあげ、続いて「2. 后来又作為贈送妓女財物的通稱。」として宋代陸遊の詩、明代小説『初刻拍案驚奇』などの例を掲げている。日本においても上記1の意味は古代から、2の例は中世から見られ<sup>(9)</sup>、早くから日本語に受容さ

れていたことが知られる。同じ村島婦之による他の文章には、

○チップとは、祝儀、纏頭<sup>はな</sup>の如き意味のもので、客が任意に与へるところのものである。（『歓楽の王宮 カフエー』1929年）

という「纏頭」に「はな」をあてる例も見られる。同様の例は古く、

○若<sup>キハ</sup>豪客<sup>キバリテ</sup>ノ則<sup>ス</sup>併<sup>ニ</sup>妓<sup>トモ</sup>之從者<sup>ハ</sup>家之嫗婢<sup>ハ</sup>皆受<sup>ケ</sup>其<sup>ハナ</sup>纏頭<sup>ヲ</sup>（成島柳北『柳橋新誌』初編1859年＊原本の振り仮名は左傍）

等の戯作に認められるが、これは「纏頭」が中国の近世小説に、

○笑時花近眼，舞罷錦纏頭。大宴已成，衆樂齊拏。（『水滸全伝』八十二回）

○当日取出十兩銀子送与王賽兒，做昨日纏頭之費。（『初刻拍案驚奇』卷二十二）

○所得纏頭金帛之資，尽情布施，毫不吝惜。（『喻世明言』卷二十九）

○青樓買笑，纏頭那惜千緡。（『醒世恆言』卷三十七）

○此時賈姨奔走慇懃，纏頭浸潤，也成了一個家業了，（『今古奇観』卷四十四）

等のほか、しばしば用いられていることからの影響と考えられる。

このように「ぼち」は「はな」と類義的であるが、「はな」については、

○花代とは現物（＝花）のかわりに与える金銭のことで、祝儀料を意味した（床（とこ）花・総花など）。のちには花街の専用語となり、祝儀でなく規定の遊興費の通称として関西を中心に使用されている（関東では遊興費は玉代（ぎょくだい）という）。[原島陽一]（〈関東では遊興費は玉代（ぎょくだい）という〉。[原島陽一]（『花代』『日本大百科全書（ニッポニカ）』＊ジャパナレッジ所収に拠る）

のように「花代」の形で、関西における〈規程の遊興費〉の意味に用いられる（前掲『わが新開地』の第二例参照）が、「ぼち」はあくまでも〈心付け〉の意にとどまることばである。

「チップ」については、前掲『歓楽の王宮 カフエー』に「祝儀、纏頭<sup>はな</sup>の如き意味のもので、客が任意に与へるところのもの」とあったが、それ

に続く文中に、

○中には、出て行きがけに釣銭の銅貨までひつ浚つて、そのまゝパイと出て行く客があるんだからやりきれない。…中略…女給さんたちはこれを「ハリー」といってゐる。ハリーといってもあんまのことではない。英語の **Hurry** の訳語でボチも置かず<sup>に</sup>に急いで出るといふ意味である。あんま見たいに呼ばれたくなかったら、洋食の一皿を節約してゐても、円助位のチップは、置いて行くのがカフエー国の憲法である。

とあって、「ぼち」と「チップ」がほぼ同義のものとして扱われている。「チップ」が英語 **tip** にもとづく外来語であることは周知の通りであるが、このころから「はな」「ぼち」に代わって広く用いられたもののようである。

「サービス料」に関しては、

- 1、サービス料は、心付け、祝儀、チップ又はボチ等と称する。
- 2、サービス料は元来お客様が、サービスに対して満足感謝した<sup>しるし</sup>に<sup>し</sup>与へらるゝものである。
- 3、サービス料は請求すべき筋合のものでない。
- 4、請求すべきものでないが、お客様が何程出したらいいかの判断に苦しみ却って迷惑をかける事を懼れて、最近は一定割合の金額を出して頂戴する事がある。

(金丸直利『接客読本』1938年)

という定義の例があり、本来「ぼち」や「チップ」と同様、客の任意によるものであったものの、定額の料金として規定する場合のあることが記されている。現在の「サービス料」はほぼ後者の意に用いられるが、この時期において既にその性格を有する語であったことが知られる。

このほか、次のような「ぼち」の使用例も見られる。

○サンヤを開けて見ながら「やあボチもうんと貰つてゐるぢゃないか」と云つたので僕は、「ボチつて何の事だい」と聞くと横から今ちやんが



「尾崎はんポチと云ふのは銀貨の事よ」と教へて呉れた。(山田呵々子「故郷より故郷へ」『愛生』二号 1932 年)

この「僕」は静岡の出身で、大阪で「乞食」をしている時の会話である。ここから昭和初期の当時において、「ぼち」は一般に知られたことばではなく、関西における隠語的表現のことばであったことがうかがわれる。

## 5. 「ぼち袋」- 方言・隠語からの脱却

隠語辞典の類には、

○ぼち 祝儀のこと。チップのことをいふ。〔花柳語〕(宮本光玄『かくし言葉の字引』1929 年)

をはじめとして、「ぼち」の使用地域を特定しないものもあるが、その中には、

○ポチ (1) 祝儀のこと。東京辺の方言で、小さいつまみのことをポチチというところから出た語。(日本言語研究会『語源明解 俗語と隠語』1949 年)

のように、東京方言に由来する語という意識を明記したものも見られる。これはあるいは、この時期には東京でも「ぼち」を使用するようになっていたことを示すものかとも思われるが、他の類例を確認できない。

〈心付け・祝儀〉を意味する「ぼち」が広く全国的に知られるようになったのは、〈祝儀袋・お年玉袋〉を意味する「ぼち袋」の使用拡大によるものであろう。「ぼち袋」の普及については、

○お年玉を入れる袋は、もっぱら祝儀袋や文具の専門店、百貨店が扱っていた。それが 10～15 年前からスーパーやコンビニなど小売りの量販店も扱うようになり、そのころから「ぼち袋」という呼称が広がったという。生活雑貨店のロフト(東京・千代田)が、「ぼち袋」という名称をつけ全国各地の店舗で専用売り場を設けたのも 10 年前ころからだ。(山本紗世「込めるのは心 お年玉袋を「ぼち袋」と呼ぶわけ」『日

本経済新聞電子版 ことばオンライン』2014年12月24日)

として、2014年の10～15年前、すなわち2000年前後ないしそれ以降とする記述も見られるが、実際には、

○浅草専門店会（会長穂刈幸雄氏）は三月二日から六日まで、伊勢甚水戸店で第七回浅草まつりと江戸の職人芸展を開く。同専門店会から二十一店が参加し、雷おこし、いもようかん、金太郎あめ、竹製品、おもちゃ、和紙人形、バッグなどを販売するほか、豆だこ、組ひも、たび、和傘、べっ甲細工、ぞうげ細工、ぼち袋、包丁とぎの八人の職人が職人芸を実演する。売上目標は三千万円。（『浅草専門店会、3月2-6日水戸で「浅草まつり」開催。』『日本経済新聞』1984年2月24日地方経済面・北関東4面）

○お年玉袋や大入り袋など小さな「ぼち袋」を集めたミニ展が十四日まで、神奈川県立川崎図書館（川崎市）で開かれている。「これっぽち」という言葉が語源とも言われるぼち袋。京阪地方では古くから心づけのことをぼちと呼んできた。新春らしいこのミニ展は、東京・小金井市の添川清さんのコレクション。添川さんはぼち袋だけで約五千枚を収集しており、今回は大正から昭和初めの約三百五十枚。歌舞伎役者の名入りから大正ロマンを感じさせるものまであり、時代をよく映している。（『「おあしす」お年玉袋や大入り袋など小さな「ぼち袋」を集めたミニ展を開催』『読売新聞』1989年1月11日東京朝刊27面）

○東京の下町、谷中で約130年続く老舗の和風雑貨店。店内にはオリジナルの千代紙や犬の張り子のほか小箱、ふろしき、うちわなどが所狭しと並ぶ。…中略…

——雑貨もたくさん販売してますね。

「犬の張り子、ポチ袋（祝儀袋）、小箱、ふろしき、座布団カバー、日傘、財布、手帳など全部で四百～五百品目ほどです。ネクタイや食器もありますね。犬の張り子をのぞく雑貨の図柄はすべて千代紙から取り、メーカーに製造を委託しています」（『菊寿堂いせ辰（千代紙・和風

雑貨，東京都台東区）高橋久子氏（元気な商店主）」『日経流通新聞』1993年  
9月16日9面）

等の例に見るごとく，1980-90年代には既に，「ぼち袋」は関東においても用いられていたものと考えられる。

## 6. おわりに

「ぼち」という語形の成立については，本稿の「はじめに」で紹介した文章中に，

○ポチはもともと小さい点や突起を意味した。「できものがポツッとできる」の擬態語ポツツも関係があると思われる。さらに「これっぽち」「それっぽちち」「百円っぽち」の「ぽ（っ）ち」も元は同じことばで，「これ」「それ」といった代名詞や小さな数量のことばについて，それだけしかない意味を表す。（佐竹秀雄「[もの知り百科] ことばのこぼこ ポチ袋」『読売新聞』大阪夕刊2001年1月15日夕刊2面）

という語源説が示されており，例証は難しいものの，概ね妥当な考えのように思われる。

犬の名前に用いられる「ぼち」が，本来は必ずしも小型犬に対するものでなかったことは仁科邦男（2014）に詳しいが，

○犬などの小さい動物に名づける名称。『宅のぼちはよく，吠える』（平凡社『大辞典』1931年）

等の記述を見れば，遅くとも昭和初期頃には小型犬に相応しい名称として定着していたことが知られる。「ぼち」「ぼち袋」が，お年玉をはじめとする比較的少額の心付け・祝儀を示す語として広く受容されるに際しては，小型犬・愛玩犬のイメージがある「ぼち」の存在も影響したものと考えられる。また，

○みんなでコタツに入りながら，しばし言葉談議になる。「どうしてポチ袋なんていうのかしら」の問いに「小さいという意味のフランス語

のプチからきたって聞いたことがあるよ」と珍説も飛び出す。（「語苦  
楽帳／ポチ袋」『中日新聞』1995年1月10日夕刊3面）

○フランス語のプチ *petit*（小さい）からというのは民間語源説。（堀井  
令以知編『大阪ことば辞典』1995年）

のように付会の説ではあるものの、フランス語 *petit* との連想の働いたこ  
とも、「ぼち袋」という名称の普及に役立ったものと考えられる。

## 注

- (1) 引用は『日本戯曲全集』歌舞伎篇第23巻（1931年）に拠った。
- (2) 注(1)に掲げた『日本戯曲全集』の解説（渥美清太郎著）に拠る。
- (3) 暉峻康隆（1957）に「はな」に関する言及がある。
- (4) 青空文庫の検索、および『明治文学全集』『新日本古典文学大系 明治編』（2015年1月現在の既刊分）の目視による検索では用例を確認できなかった。
- (5) この例は米川明彦編『日本俗語大辞典』（2003年）に紹介されている。
- (6) 「ハ々（はちはち）」は「花札の競技の一種」（『日本国語大辞典』第2版）
- (7) 近石泰秋『香川県方言辞典』（1976年）に拠れば、「心づけ。チップ。祝儀。」の意の「ぼち」は、加藤増夫『郷土俚語方言集 高松市並に香川県地方』（1931年）に登録されている。
- (8) 『近代庶民生活誌』第二巻（1984年）の解題（落合重信執筆）による。なお、この村上帰之『わが新開地』、同『歓楽の殿堂 カフエー』、金丸直利『接客読本』、および山田呵々子『故郷から故郷へ』の引用は、『近代庶民生活誌』所収の本文によった。
- (9) 『日本国語大辞典』第二版による。

## 引用参考文献

斎藤夜居（1983）「新発見奇書『おさめかまいじょう』」（『書物と人』第一冊）  
 暉峻康隆（1957）『すらんぐ（卑語）－ネオン街から屋台まで－』光文社  
 仁科邦男（2014）『犬たちの明治維新－ポチの誕生』草思社  
 花咲一男増訂（1992）『おさめかまいじょう』太平書屋

（はしもと ゆきひろ・花園大学教授）